

# Glocal Tenri



1

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.1 January 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
祭儀の持ち方  
／永尾教昭 ..... 1
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (44)  
「おさしづ」第6巻における本部事情と「道」  
／澤井治郎 ..... 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (30)  
国際化の中での日本語教育①  
／大内泰夫 ..... 3
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (23)  
2020年10月16日の歴史地理教師斬首事件を  
受けて  
／藤原理人 ..... 4
- ・ キルケゴールで読み解く21世紀 (28)  
可能性と現実性—コロナ禍の中でキルケゴール  
を読む  
／金子 昭 ..... 5
- ・ イスラームから見た世界 (9)  
<sup>アラブ</sup>神の名を唱えて生きるムスリムたち  
／澤井 真 ..... 6
- ・ 宗教伝統における聖典の意味構造 (4)  
イスラーム聖典のパロル性<sup>①</sup>と井筒俊彦  
／澤井義次 ..... 7
- ・ 遺跡からのメッセージ (65)  
大和の文化遺産を学ぶ③—飛鳥の古墳と聖なる  
ライン  
／桑原久男 ..... 8
- ・ 2020年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学  
ぶ (6)  
第2講：77「栗の節句」  
／佐藤孝則 ..... 9
- ・ 図書紹介 (121)  
中純子著『唐宋音楽文化論—詩文が織り成す  
音の世界—』  
／堀内 みどり ..... 10
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 11  
第334回研究報告会 (尾上貴行) /  
第335回研究報告会 (清水直太郎) /  
『グローカル天理』合本、バックナン  
パーについて / 2020年度公開教学講  
座の案内

## 巻頭言

### 祭儀の持ち方

おやさと研究所長 永尾教昭 *Noriaki Nagao*

前号巻頭言で、天理教の海外布教を考え非ムスリムから見れば、メッカへの礼拝やる上で、原典の一つである「みかぐらうた」女性の格好は特殊なことに見えるが、イスラム社会では普通のことである。

の外国語への翻訳について言及した。これ天理教の場合、祭典における聖職者と信者の境界がない。つまり、ある人が入信し外国語にすると語順が変わってしまうこと教会などに通うようになると、多くは会長などから「おつとめの鳴物の一つでも覚えがないか」と促される。そして皆で祭儀を勤める。スポーツに例えるならば、スタンドにいた熱心な観客が、競技場に降りてユニフォームを着て競技をするように誘われ、そして全員で競技するようなものである。通常の宗教の祭儀形式しか知らない人は、ここで戸惑う。実際、筆者が天理教ヨーロッパ出張所長を務めていた頃、あるフランス人が毎日のように参拝に来だした。筆者がある日、彼に「そろそろハッピーでいいから着用して、鳴物の練習をしないか」と促した際、彼は驚いて「私は生涯この信仰を続けるつもりだが、聖職者になるつもりはない」と答えた。またコンゴでは、ある信者が「天理教は複雑だ」と述べた。

世界宗教と言われるような宗教でも、例えばコーランはアラビア語で理解すべきと言われ、世界には当然意味のわからない信者もいるだろうが、それでも世界で伸びつつある。また仏教の経典は、一般人には理解不能だが日本国内でも大きく広がっていった。

これらを斟酌すると、「みかぐらうた」もたとえ外国人には意味がわからなくても日本語で唱えれば良いのではないかも思える。しかし、その点に関しては天理教の祭儀の持ち方が特殊なので、同じように考えることはできないだろう。

通常、宗教は、専業か否かはさておき信仰の道を生業にする人（聖職者、出家）と一般信者（在家）で構成される。祭典で祭儀を司るのは聖職者などと呼ばれる人たちで、信者は後方で参列するだけである。聖職者は特殊な服装をして特殊な儀式を執り行う。神道もキリスト教も仏教も、皆そういう形である。

これをスポーツの試合に例えると、聖職者はいわば「選手」であり、信者は「観客」だろう。選手たちは特殊な服装（ユニフォーム）を着用して、特殊なこと（競技）をする。観客はそれを見るだけだ。公的な試合で、観客も競技場へ降りてきて競技をするなどということはない。つまり一般信者が祭儀を執行することはない。

例外は、イスラム教だろう。この場合、いわば全員が観客席にいるようなものである。全員で共に礼拝を行う。特に特殊な服装や特殊なことをするわけではない。

メッカへの礼拝や女性の格好は特殊なことに見えるが、イスラム社会では普通のことである。

天理教の場合、祭典における聖職者と信者の境界がない。つまり、ある人が入信し教会などに通うようになると、多くは会長などから「おつとめの鳴物の一つでも覚えがないか」と促される。そして皆で祭儀を勤める。スポーツに例えるならば、スタンドにいた熱心な観客が、競技場に降りてユニフォームを着て競技をするように誘われ、そして全員で競技するようなものである。通常の宗教の祭儀形式しか知らない人は、ここで戸惑う。実際、筆者が天理教ヨーロッパ出張所長を務めていた頃、あるフランス人が毎日のように参拝に来だした。筆者がある日、彼に「そろそろハッピーでいいから着用して、鳴物の練習をしないか」と促した際、彼は驚いて「私は生涯この信仰を続けるつもりだが、聖職者になるつもりはない」と答えた。またコンゴでは、ある信者が「天理教は複雑だ」と述べた。

仏教、あるいはラテン語でミサを執り行っていたカトリックの場合など、たとえ言葉がわからなくても聖職者（出家者）だけがそれを唱え、信者はそこに列席するだけだ。仮に一緒に唱えるとしても、文句に合った動作をするわけではないから、言葉の意味がわからなくてもさして問題はないかもしれない。しかし、天理教の場合、聖職者と信者が区別なく祭儀を司る、つまり楽器を奏でたり踊りを踊るので、その言葉がまったく理解できなければ、楽器演奏はともかく踊りを踊るのは多くの一般信者にとっては非常な困難を伴うことになる。いわば、意味のまったくわからない経を唱えながら、その意味に添った踊りを踊るようなものである。この点は海外布教の全体を俯瞰しながら、慎重に考慮していく必要があるだろう。

## 「おさしづ」第6巻における本部事情と「道」

『おさしづ改修版』第6巻(明治35～40年)の本部事情における「道」の用例を整理する。第6巻には本部事情の「おさしづ」が42件ある。そのうち、「道」が用いられるのは25件、3回以上「道」が繰り返して用いられるのは15件である。

この時期は、天理教の一派独立の請願が繰り返して行われた時期であり、「道」が用いられる「おさしづ」は、そのことにかかわる伺いが多くなっている。

## この道というものは、幾年経っても付けにやならん

一派独立請願の先長い道のりを予見してか、「付け掛けた道」あるいは「この道の掛かり」と言われている。

「道という道は、付け掛けた道やによって、何でも彼でも、幾年掛かっても付けにやならん。……この道というものは、幾年経っても付けにやならん。成らん中から、天然という道あちらに一寸、こちらに一寸、道の固まり出け掛けたる。一時にどうしても出け難い。そこ手遅れと言う。成っても成らなくても通らにやならん道やで。……この道の掛かりは、先ず一代という、どうでもこうでも不自由難儀の道通らにやならん。不自由の道通るは天然の道という。神の望む処である。」(さ35・7・13 御供の件に付昨日東京へ出張の松村吉太郎より申し越されしに、内務省の局長の御話には金米糖は絶対に廃止せよとの御話である。若し出来ざる時は製造の方法に対し、腐敗せざるよう出来ざるものか、と言うに付、心得までに願)

このように、「掛かり」、つまり最初のうちは、なにかと不自由することも多いと言われる。しかし、その中から、あちらこちらに道がつきかけている。思惑どおりいかなからと別の形や方法に変えるのではなく、その中を神にもたれ、踏ん張って通ることを促され、そうすれば自ずと成ってくると説かれている。

## 通りよい道と通り難い道

同じような文脈で、通りよい道と通り難い道を対比させて、心の治め方を論される「おさしづ」が複数みられる。

「もうこれだけの道と言え、大きき道は怪我をする。細い道は怪我は無い。大きき道で怪我はある。細い道は怪我は無い。細い道は怪我は無いというは、危ない〜という心を持ちて通るから怪我は無い。世界何の心掛けずして通れば、どんな怪我あるやら知れん。これだけこれだけ道付いてあるのに、こういう事では、と、心細いと思う。なか〜そやない程に〜。」(さ35・7・20 過日のおさしづより一人も残らず願出よ、との事に付願／引き続いて)

「さあ〜通りよい道は通りよい。通り難い道は通り難い。通り難い道ある。これだけ順序の道に論し置こう。情に流れなよ、と言うた日ある。情に流れて了てからどうもならん。……通りよい道は通りよい。通り難い道は通り難い。細道は通りよい、往還道は通り難い、と言うてある。」(さ37・3・29 教長御上京の時内務省宗教局長より金米糖御供の事に付種々話しの結果、洗米と改め下付する事一同協議の上願／押して、洗米に替えさして頂きませ願)

「紋型無い処から順序追うて来たる道。難しい事望んで、難儀苦勞さす道を付けたのやない。ほのかに論して居るやろう。理は一つに纏まりてくれにやならん。皆々よう聞き分けてくれにやならん。道という、道は楽の道は通りよい、難しい道は通り難い。難しい道の中に味わいある。」(さ37・8・23 日露戦争に付、天理教会に於て出征軍人戦死者の子弟学資補助会組織致し度く願)

一見すると、大きい道、往還道は通りやすく、細い道は通りにくいように見える。しかし、実際には、細い道は一層心掛けて通るので通りやすく、大きい道や往還道は油断しやすく、怪我もしやすい。こうした論しは、天理教会が設置・拡充される頃に繰り返されていたが(第1巻)、その後しばらくはほとんどみられない。第6巻におけるように、一派独立運動が本格化するこの時期に、再び同じような言葉で、一見通りやすそうな道を目指すのではなく、細い道でも、着実な歩みを進めるように論されている。

## 道を伝えてくれにやならん

その歩みを進める際の心の治め方について、次のように説かれている。

「一人々々の心以ちて、道を伝えてくれにやならん。どれだけ十分これだけ十分と思う心は間違うてある。よう聞き分け。もう着るもの無けにや、もう無うても構わん〜。美しい物着たいと思う心がころりと違ふ。……さあ皆その心なら、案じる事は無い。世界から力入れて来ても、真実教、真実の心あれば、抜いた剣も鞘となる〜。抜いた剣が鞘となるというは、真実神が受け取りたるから、心膽治まる。」(前掲、さ35・7・20 過日のおさしづより一人も残らず願出よ、との事に付願)

「一人々々の心以ちて、道を伝えてくれにやならん」と言われる。この「道を伝えてくれ」というのは、道をもっと人に伝えてくれという意味ではない。一人ひとりが真に教をたよりに、道をつたい歩んでくれ、ということである。そうすれば、親神がその真実を受け取ると教えられる。

飯降伊蔵本席による最後の「おさしづ」には、「おさしづ」が伝えられてきた20年が振り返られている。

「二十年の間ほんの聞いただけにて、目に見ゆる事無しに來た。二十年の間言うて置いたる事出て來た。道の者皆見て知って居るやろう。これだけ一寸知らし置こう〜。皆々惣々思案無くばならん。皆々力無くばならん。」(さ40・6・9 昨日分支教会長普請の事に付会議を開き、本席の御身上も普請の上から御苦しみ下さる事でありますから、部下教会長一同わらじの紐を解かず一身を粉にしても働かさして頂き、毎月少しずつでも集まりたるだけ本部へ納めさして頂く事に決め申しました、と御返事申し上ぐ)

「おさしづ」で説かれてきたことは、「道の者皆見て知って居るやろう」と言われる。翻ってみれば、「道の者」なら説かれてきたことを、よく知っているべしということになるだろう。そこから皆が思案し、身に行うことを、「道の者」に期待されているのである。



## 国際化の中での日本語教育 ①

## コンビニのできごと

小冊子を送りたいので、レターパックを買いにコンビニへ行った時のことである。店に入りレジのところまで若い店員さんに「レターパック、ありますか。」と聞いたところ、「アノ、ソレハナンデスカ…。」と返答したので、発音からすぐにアルバイトの留学生かと思った。そこで「本を送りたいのですが…。」と言ったところ、レジの引き出しから宅急便の送り状を出して「コレデスカ。」と言ってきた。「あ、それじゃなくて、厚紙で本が入るくらいの大きさの…。」と説明したところ、またレジの別の引き出しの中を探しているようだった。「A4サイズくらいの物が入る大きさで…。」と更に説明したのだが、さすがに困った様子で、「スママセン、チョット、アノヒトニ…」と、商品棚にお菓子を並べている店員さんを指差した。すぐにその日本人の店員さんが対応してくれて、レターパックを出してくれた。わからないことがあったら、聞き返し、また身振り手振りも交えて、意思疎通を図ろうとすることはコミュニケーションにおいて大事なことである。この外国人の店員さんの対応を筆者は特に不快には感じなかったが、店を出た後、彼は日本語をどこで習ったのか、どのくらい日本語を勉強したのかと気になった。

## 国の政策転換

在留資格が「留学」の学生がアルバイトをする場合には、地方入国管理局で「資格外活動許可」を申請しなければならない。入管法では、学校がある時は、週28時間まで働くことが認められている。また夏休み、冬休みなど学校が定める長期休業期間中は、1日8時間まで認められている。これ以外にも2019年4月から外国人労働者の受け入れを拡大する新たな制度が始まった。改正入管法で「特定技能」という在留資格が新設され、これまで「高度な専門人材」に限定されていた就労目的の在留資格を、事実上の単純労働者にも認めることになった。これは国の大きな政策転換である。人手不足に困っている産業界では歓迎する声もあるようだが、日本語教育に携わってきた筆者としては大丈夫なのだろうかという思いもある。1990年に入管法が改正された時に様々な問題が起こっていたが、今の政府の外国人労働者受け入れに対する考え方も正しいのだろうかと感じる。2020年11月新型コロナウイルスの渦中にある現在、日本では技能実習生という名目の実質的には労働者が入国できず、農業、漁業、水産加工業、建設業などで人手不足に陥っていると聞く。野菜なども人手不足で収穫が間に合わず、結果的に野菜の値上がりという事態も起こっている。少子高齢化で労働力不足を補うのに「技能実習」という制度のもとに労働者として都合よく使ってきたという事実が新型コロナにより、多くの日本人にも認知されるようになったと言える。「実習」か「労働」かというような本音と建前ではなく、もっと根本的に考えなければならぬことをコロナ禍は訴えているようにも思える。

## 外国人労働者の受け入れ

現在の日本で外国人労働者が今後も増えていくことは止められない動きである。グローバル化が進み、経済格差から他国への出稼ぎなどで、外国人労働者が増えることも当然のことかも

しれない。労働力が過剰な国から、労働力が不足している国へ人が流れるのは自然なことであり、また日本の少子高齢化も影響している。先進国の中では、フランスのように少子高齢化対策を実施して出生率が上がっている例もある。もともとフランスは、人口減少によりスペイン、ポルトガルから労働者を受け入れたり、それ以外にもベトナム難民など、移民の受け入れをしてきた国であり、日本とは単純に比較はできないが、学ぶべきことは多い。1990年にフランスに出向していた時、本当に外国人労働者が多い国だと実感した。出向したのは天理教ヨーロッパ出張所（当時はパリ出張所）の神殿普請の頃だったが、神殿普請の現場で働いている人はスペイン、ポルトガルなどからの労働者だったようだ。また住んでいた郊外の住宅地では高齢者が多いという印象もあった。私のクラスにやってくる日本語学習者も多様であった。生粋のフランス人という人もいるのだろうが、髪や肌や目の色で決められるものでもない。多様化というのはこういうことかと実感した。当時、日本もいずれこのようになるのだろうかとも漠然と感じていたが、その時に感じていたことが現実化してきているようにも思える。多様化すればするほど、それに応じて問題も起こってくるのだろうが、その時こそ宗教の役割が大きいようにも思う。天理教の原典「おふでさき」には次のお歌がある。「たんへとなにに事にもこのよふわ 神のからだやしやんしてみよ」（第3号40）、「にんけんはみなへ 神のかしものや なんとをもふてつこっているやら」（第3号41）。この世の中は「神のからだ」であり、人間も神から体を借りて生きているのであり、多様化している社会の中でも皆同じ「神のからだ」に生きる者同士としてお互いが和して暮らしていくことが求められている。

## 日本語教育推進法

2019年6月28日、文化庁が各都道府県知事や教育委員会、地方公共団体、国公私立大学などの長に「日本語教育の推進に関する法律の施行について」という通知を出した。この法律の詳細についてはインターネットで「日本語教育の推進に関する法律」や「日本語教育推進法」などのキーワードで検索すればすぐに出てくるので割愛するが、基本的には賛成できるものである。外国人労働者と家族が日本語を学ぶ機会を得られるよう支援をしていくという点で方向性は間違っていない。こういった法律を整えていくことで自治体が日本語教育の施策を実施しやすくもなるであろう。ただ、この法律は基本的な理念であり、具体的な施策というのは国の行政機関やそれぞれの自治体に任せられているようだ。2019年4月に施行された改正入管法には、外国人労働者が家族を連れてきて働ける「特定技能2号」もあり、今後、その家族に対する日本語教育のことも考えなければならない。小中学校でも日本語教育が必要な子どもが増える可能性もある。こうした現状を考えると、日本語を教える人材が不足するのではないかと感じる。また日本語教育の質の面でも十分なことのできるのだろうかという疑問も残る。日本語教師を養成する面でも課題はたくさん残されている。法律を整備していくことも大事だが、実際に現場で対応していかなければならない人材の育成が急務である。

私自身もフランスで中等教育（中学と高校）に従事しているが、おぞましい事件が起きた。ある公立中学の歴史地理の教師が、中学2年の授業でムハンマドの風刺画を扱ったことを理由に、イスラム過激派のテロリストに路上で斬首されたのである。

そもその前提として、暴力やテロ、ましてや殺人など肯定できようはずがない。いかに風刺画がひどいものだとしても。事件の直後、教師をはじめ多くの人々がデモ行進した。殺害された教師とその家族に連帯を示すとともに、表現の自由という大義名分を守るためでもあった。また11月2日フランス全土の学校で1分間の黙とうが行われ、ライシテを振り返る意味を込めてジャン・ジョレスの「教員への手紙 (Lettre aux instituteurs et institutrices, le 15 janvier 1888)」が読まれた。

個人的には、教師がムハンマドの風刺画を授業で使用したこと自体は問題ないと考えている。フランスの公教育におけるライシテの原則として、神聖なものは存在せず、存在しないものを冒涇するという概念も存在しない。しかし、与える側は受け取る側への影響を考える必要もある。ひどい消化不良を起こすようなものを与えるべきかどうか。保護者が敏感に反応する年代の授業で、大人も消化しきれていない教材を使うことに対する判断基準は何だったのか。11月19日のルモンド紙によると、問題になった10月8日の授業以降、学校は脅迫などで緊張状態が続いていたらしい。テロリストに口実を与えたと非難する同僚もいたようだ。またこの教師は、配慮のつもりで、風刺画でショックを受けるとする生徒は教室を出たり、目をつむったりするように指示していたという。それはつまり公共教育の場で、自身の信教信条を示させることになる。これはライシテの理念に反する。とはいえ、彼は授業後に不手際があったことを認め、クレームのあった家庭には謝罪し、もうこのテーマの授業はやめて、次は移動の自由か中国のネット上での検閲を抜こうと思うと述べていたという。非があれば認め改善しようと努力する、素晴らしい教師だったのだろう。

公教育の場には当然保護者の影響がある。宗教上の理由で公教育の基本的な原則を受け入れないのは論外だろう。2019年9月から2020年3月までの間に、宗教的標章の着用、教師への問題行動（男子生徒が女性教員に話しかけるのを拒否するなど）、学校活動（プール、性教育など）の拒否、布教活動といったライシテの原則に抵触する事例が923件報告されている。ライシテの問題は、間違いなくいまも教育の場でくすぶり続けている。

ところで、『風刺画』というのは、高度な知性が必要だ」と書いている記事を読んだが、個人的には表現の自由には高度な精神性が求められると感じる。ライシテの闘争を経て信仰をもつ自由ともたない自由を得たが、その結果心を鍛える手段が弱くなってしまったということはないだろうか。一般的に、フランス人は強固な信念と強い自由意志を持って発言し、そこに揺るがない自信があると受け取られている。それは事実であろうと思うが、自由の名のもと何でもかんでも好き勝手な言動をする人たちではない。対面する人の気持ちを汲み取り、温かい思いやりをもって接してくれる。表現の自由を、心の節制をもって実践している人たちだ。ホロコーストやナチス賛美に対する

厳しい対応でもそれが分かるだろう。しかし、テロリストの暴力に過激な感情をもって訴え、表現の自由という言葉に酔って対立構造を煽っている人たちがいると思えなくもない。事件後マクロン大統領が演説で風刺を捨てないと明言した日、トゥールーズ市とモンペリエ市では、シャルリ・エブド紙のムハンマドの風刺画がプロジェクターで庁舎正面に映し出されたという。

風刺画自体は、もちろん表現の自由として尊重されるべきだ。この連載でカトリック教会や政治家に対する風刺表現を紹介したこともある。しかし、「風刺を受け流せないのは、フランスの自由や共和国精神が分かっている」という構図ができあがり、甘受できないことが悪とされるような風潮がある。フランス在住の善良なイスラム教徒はムハンマドの風刺画に苦しんでいると思う。そしてそんな風刺画は少数なのに、いろいろなところでそれらの風刺画を使用、転用して、フランスに同化しようとする市民の痛みを増幅させている。それはフランスの博愛の精神に反しないのだろうか。キリストの風刺画もたくさんあるから同じだという理論は現実にはそぐわない。いわば身内の、しかも権力の権化として批判の対象だったカトリックを追いやる中で耐性を身につけた人たちと、その後フランスに住んだイスラム教徒とでは、今現在の問題として受け取り方に差がある。そして、イスラム教徒を自認する非常識なテロリストがそんな風刺を受け入れないのは明白で、フランスはテロの標的になっている。それだけが原因ではないにせよ、イスラムを侮辱するごく少数の風刺画がフランスの国全体を危機に陥れるのに一役買っている。

体制宗教としてのカトリック批判、そこからの脱却、そして勝ち得た信教の自由。加えて、移動、言論、結社などさらに大きな自由を享受できるようになった。これらはフランスが人類に貢献した誇らしい遺産であろうと思うし、今後も人間にとって失ってはいけないものだと思う。しかしながら、それで勝ち得たものが新たな対立構造を生み出し、その憎しみの増幅装置のように機能するのであれば、負の遺産となってしまう。はたして1905年法以前と比べ、精神性は向上したのか。宗教が以前のように大きな影響力を持つことはなく、また宗教側の甚大な努力も不可欠だとはいえ、その教義にはまだまだ精神の進歩に貢献できる余地があるように思う。

[参照インターネットサイト] (2020年11月28日閲覧)

今井佐緒里 『18歳が教師の首を切断するテロ。フランスで何が起きたのか：イスラム教徒との共生社会のために』 <https://news.yahoo.co.jp/byline/saorii/20201018-00203502/>

"Des caricatures de "Charlie Hebdo" projetées à Toulouse et à Montpellier" <https://www.lci.fr/population/hommage-samuel-paty-les-caricatures-de-charlie-hebdo-projetees-a-toulouse-et-a-montpellier-2167922.html>

"Ces centaines d'incidents que décrivait le rapport sur la laïcité à l'école remis à Jean-Michel Blanquer" <https://www.marianne.net/societe/education/ces-centaines-d-incidents-que-decrivait-le-rapport-sur-la-laicite-a-lecole-remis-a-jean-michel-blanquer>



「一つの可能性」

キルケゴールは『人生行路の諸段階』の中で、「一つの可能性」という不気味な短篇小説を書いている<sup>(1)</sup>。

コペンハーゲン郊外のある町に、記帳係と呼ばれた男が住んでいた。彼は毎日午前 11 時から 12 時の間、孤児院橋と海岸通りを何度も往復することで、町の人々に知られていた。彼は普段はとても穏やかな人間で、とりわけ子供たちを見ると優しい顔つきになるのだった。だが、この時間帯は誰が話しかけても何も答えず、まるで何かに憑かれたように見えた。そう、彼はある思いに取り憑かれていたのである。いつだったか若い頃、彼は悪友たちに誘われてある場所であることを行った。その結果、ある決定的なことが起こったに違いない、そんな確信が彼に芽生えた。彼は自分によく似た顔の子どもがいなかったか、いつかそつと子供たちの顔を見るようになった。だが、それが分かる手立てはどこにもなかった。彼は精神病になって、同じ時間に何度も孤児院橋と海岸通りを行き来するようになり、やがて病気になるまで死んだ。

この男が取り憑かれていたのは、一つの可能性であった。しかし、その可能性は決して現実性にはならない、どこまでも単なる可能性であった。しかもそれは、彼が自らの心の中から作り出した可能性であった。彼はその可能性の中で、ついに自らの精神を食い尽くされてしまったのである。キルケゴールは、可能性というものが持つ無限ループのような恐ろしさについて示唆している。

可能性と人間の不安

我々は通常、可能性はあくまで単なる可能性に過ぎず、現実性が持つ重みは持たないと考えている。果たしてそうだろうか。キルケゴールは『不安の概念』の中でこの問題を掘り下げた。彼によれば、可能性はいつか現実性になりうるから可能性と言われるが、まさに可能性なるがゆえに本質的に無限であり、いくらでも可能であるという性格を持つ。そのことが人間を「不安」に引き込んでしまう。一方、現実性は現実性であるに起こっている事実であって、それは本質的に有限であり、ただ一つだけしかない。だが、可能性は可能性なるがゆえに何物にもなっておらず、また何事もそこで起こってはいない。まさにその「ない」(無)が人間を不安に陥れるのである。そして、その可能性とは多くの場合、人間が自らの心の中から作り出すのである。

心気症の患者の場合が好例だ。彼は自分が病気になるのではないかと不安でたまらないが、いったん病気になるという現実を受け入れたならば、これに全力で取り組むことができる。どれほど重大な現実性であっても、自分が作り出した可能性よりは絶対に恐ろしくないのである。

しかし、可能性を持つことは、人間が人間である証しである。というのは可能性こそが人間が自由であること、人間の主体性を意味するからである。それゆえ可能性のために不安に襲われても、そのことこそ自由の存在理由であるとして、その不安と正しく向き合うことが、人間が人間らしく生きていくことにもなるのである。可能性と現実性の間にはこのような逆説的關係があり、それさえ了解していれば、自らの作り出した可能性の

中に自分自身を見失うことはない。キルケゴールはそのように語っているのである。

コロナ禍での可能性と現実性

このところ、第三波とも言われる新型コロナウイルスの急激な感染拡大により、我々は不安な日々を過ごしている。自分も感染するのではないかと、感染したらどうなってしまうのか。この不安は現実性に根差した正当なものだ。しかし、相手が目に見えないウイルスだけに、人々の心の中で不安感ばかりが増してしまう恐れがある。その結果、コロナストレスやコロナうつに苛まれる人々も現れる。また、根拠のない情報が拡散して、感染者や感染者が属している組織に対する偏見を助長し、差別を誘発する。マスクをしているかどうか相互監視が強化され、“自粛警察”が睨みをきかす。こうした風評被害や集団パニックはすでに一部では実際に起こっている。

不確実な情報も飛び交っている。納豆がコロナを予防するという情報が流れた時、スーパーの店頭から納豆が品薄になった。イソジン(うがい薬)がコロナ感染を防ぐという情報が流れた時もそうだった。この時は某知事が緊急記者会見まで開いて発表したために、とりわけ大きな波紋を広げた。納豆に免疫力を上げる効果があるのは確かだし、イソジンが口腔内を殺菌消毒できるのもその通りである。しかし、だからといって、これらによって直ちに新型コロナウイルスに打ち勝てるものではない。少し冷静になって考えればすぐ分かることであるが、我々はおもすれば情報の奔流に押し流されてしまい、余裕をもって考えることがなかなかできないのである。

こうした事態は、人間の心がいかに容易に不安になりやすく、その不安感もいかに容易に増幅するものであるかを示す格好の事例である。なぜなら、不安というものこそ可能性を前にした人間の心的態度だからである。人間はあらゆる可能性について思いめぐらすことができるし、それによっていかなる行動も取ることができる。そのことは、まさに人間の自由と主体性を証しするものである。だが、問題なのは、その可能性がどこまで現実性への繋がりを持っているかということだ。現実性に繋がる回路がなければ、せつかくの人間の自由も主体性も、可能性の中で徒に空回りするしかない。

高度情報社会の現代、さまざまな情報が飛び交っているが、我々はここで少し立ち止まって、押し寄せる雑多な情報から距離を置くのも必要なことであろう。重要なのは、不安を煽るような不確かな情報ではなくて、現実的な対応を可能にしてくれる確実な知識である。現実的な対応とは、この場合、適切な予防・適切な治療のことである。現実的対応であれば、それに集中して全力で取り組み、一定の効果を上げることができるだろう。コロナ禍のただ中にある今だからこそ、キルケゴールによる可能性と現実性をめぐる議論についてじっくりと考えてみてはどうだろうか。

[註]

(1) キルケゴール『人生行路の諸段階』(中) (『キルケゴール著作集』第 13 巻)、佐藤晃一訳、白水社、245～266 頁。

## タクシー運転手との駆け引き

エジプトの首都カイロでは、タクシーはバスと同じく市民の足として手軽な交通手段である。タクシーは、俗に白タク（白いタクシー）と黒タク（黒いタクシー）に分類されている。白いタクシーには、デジタル・メーターが設置されているが、黒いタクシーには付いていない。運転手と料金をめぐる長い長い金額交渉を避けるには、白いタクシーを使用するのが一番だが（メーターが改造されていることもしばしばだが）、黒いタクシーしか捕まらないときもある。

## 神の名を唱えながらエンジンをかける運転手



タクシー運転手アフマドさん

留学して間もないある日、路上に車を止まっていた黒タクに乗り込んだ。メーターの付いていない黒タクは、白タクに比べて旧式であるため、外装も内装も年季が入っている。エンジンをかける際に、運転手は、「ビスミ・ッラー」<sup>アッラー</sup>（神の御名において）と唱えていた。筆者は当初、運転手がこのように唱えた理由を、年季が入ってエンジンもかかりにくくなったからだと考えていた。しかし、その後、真新しい白タクの運転手がエンジンをかける際に、「ビスミ・ッラー」と唱えているのを目にした。そこでようやく、「車のエンジンがかかりますように」と願って唱えているわけではないことを知った。

この「ビスミ・ッラー」とは、イスラームの聖典クルアーンのほとんど全ての章の冒頭で唱えられる文言、つまり「慈愛あまねき慈悲深き神の御名において」<sup>アッラー</sup>（ビスミ・ッラーヒ・ッラフマーニ・ッラヒーム）<sup>(1)</sup>の最初の部分である。この文言は、礼拝のたびに繰り返し唱えられており、非常に重要なクルアーンの一節である。ムスリムたちは、神の言葉であるクルアーンを日常生活で繰り返し唱えながら生活している。

## 街の至るところにあふれる神の名

このことに気づいてから、筆者は、日常生活の各場面で、「アッラー」の名前を目にしたたり耳にしたりのようになった。正確には、今まで気に留めていなかったことに注意を払うようになった。例えば、「ビスミ・ッラー」と唱えてからお茶をすすったり、吉報に「マーシャー・アッラー」（それは神がお望みになること）と口にしたりといった具合である。

特に、「ビスミ・ッラー」の文言は、食事など何かを始めるときに用いられることが多い。そのため、ムスリムの先生が授業を始める際やスピーチを始める前に、神に対する祈願文としてこうした文言を唱えるのである。

その後、アフマドさんという年配のタクシー運転手と仲良くなり、空港などへ向かうときにお世話になったが、その道中でいろんな質問をするようになった。彼はタクシーのダッシュボードにクルアーンを載せており、ミラーには「スプハ」と呼ばれる数珠をかけていた。この数珠は、「神は99の名前をもつ」というハディース（預言者ムハンマドの言行録）にちなんで、神の名前を唱える際に用いるもので、99ないしは33個の珠で作製されてい

る。33個の珠を用いるときには、3周することで99の名前を数える。時折、タクシーのなかでクルアーンを流すなど、彼の信仰心が「イスラーム・グッズ」を通してよく伝わってきた。もちろんタクシーの車内事情は千差万別である。なかには、派手な車内とは裏腹に敬虔なムスリムであることをアピールするタクシーもある。その一方で、十字架やマリアの絵画を載せる



ミラーにかけられたスプハ（数珠）

ことで、キリスト（コプト）教徒であることを示したタクシー運転手もいるように、車内は多種多様である。

「アッラー」(Allah) というアラビア語は、必ずしもイスラームの神を指す語ではない。「アッラー」とは、神一般を指す「イラーフ」(ilah) と、定冠詞の「アル」(al) から成る言葉であるため、「唯一なる」神」という意味になる。アラビア語を母語とするユダヤ教徒やキリスト教徒にとってみれば、彼らの信仰する唯一なる神は「アッラー」である。一方、イスラームにとってみれば、イスラームの神はユダヤ教とキリスト教の神と同じであり、彼らがアッラーと呼び表すことには何ら差し支えない。しかし、日本語の話者である我々が、「イスラームでは神のことをアッラーと呼んでいる」と理解してしまうと、アラビア語の「アッラー」のイメージを捉え損ねてしまうのである。

## 街角にあふれる神の名

筆者が確認したかぎりでは、「アッラー」という言葉は、駅のホームや玄関など人目につくあらゆるところに掲げられている。なかには、ビルの最上階に付けられているものもあった。当初はその理由が判然としなかったが、何度か通るたびに気がついた。そのビルの屋上には大きな広告が設置されており、その看板を目にしたついでに、「ウズクル・ウッラー」（神を想念じ、その御名を唱えよ）という文言も人々の目に入る。



大きな看板の下に付けられた「ウズクル・ウッラー」の看板

ある日のこと、「駅までいくら？」と筆者が尋ねると、「20ポンド」と相場の倍の金額を提示する運転手がいた。「10ポンドで十分でしょ」と答えても、一筋縄ではいかない。金額も決まっていざエンジンをかけようとするが、タクシーのエンジンはかからない。そういえば、「ビスミ・ッラー」は言っていなかったような。

[註]

(1) クルアーンの「タウバ章」(第9章 *ṣūrat al-tawbah*)の冒頭のみ、例外的に「ビスミ・ッラー」の文言は用いられていない。



# イスラーム聖典のパロール性と井筒俊彦

イスラームの伝統において、聖典クルアーンは、イスラーム教徒にとって「書かれた聖典」であると同時に「語られる聖典」でもある。今回は、わが国におけるイスラーム研究および東洋思想研究の碩学である井筒俊彦（1914～1993）が、アラビア語やイスラーム思想を学び始めた青年時代のエピソードに触れながら、イスラームにおける聖典のパロール性（口述性）、すなわち「語られる聖典」の側面について考えてみたい。

## 井筒俊彦と二人のタタール人との出会い

井筒俊彦は晩年、作家の司馬遼太郎との対談「二十世紀末の闇と光」（『中央公論』1993年1月）の中で、聖典論の視点から見ると、実に興味深い話をしている<sup>(1)</sup>。彼がクルアーンをアラビア語原典から初めて邦訳したことは広く知られているが、井筒がアラビア語を学んだのは、二人のロシア生まれのタタール（韃靼）人からであった。

慶應義塾大学を卒業して、大学の助手になったばかりの井筒は、アブド・ラシード・イブラヒームという高齢の人物に出会った。昭和12年（1937）のことであった。アラビア語とイスラームを2年ほど学んだが、イブラヒームはジャーナリストであると同時にイスラームの公けの礼拝を司るイマーム（指導者）でもあった。その後、イブラヒームからの紹介で、ムーサー・ジャーッラーという60歳過ぎのタタール世界で随一の学者に出会う。師ムーサーとの出会いは、井筒のその後の研究に決定的な影響を与えた。

井筒は師ムーサーとの思い出を、1983年3月、『読売新聞』夕刊のエッセイ「行脚漂泊の師 ムーサー」に記している。ムーサーも学者であるとともにイマームでもあった。わが国に2年間滞在したが、彼のもとで井筒は、アラビア文法学の「シーバワイヒの書」（8世紀の文献）とイスラーム哲学を学んだ。彼は次のように言う。

必要な書物はただの一冊も手もとになかった。そのかわり、何千ページの古いアラビア語の書物が何百冊もそっくりムーサーの記憶のなかに畳みこまれていた。ムーサーとの出会いが私の学問の方向を決定した<sup>(2)</sup>。

イスラーム世界にその人ありと知られたムーサーは、書物を一冊も手もとに持っていなかった。聖典クルアーンやハディース（ムハンマド言行録）をはじめ、神学、哲学、法学、詩学、韻律学、文法学など、ほとんど主要なテキストを記憶していたという。

筆者が井筒から直接、師ムーサーのことを聞いたのは、1984年の晩秋、井筒宅を初めて訪問したときだった。井筒夫妻との話の中で、筆者がインドへ留学した折、インド哲学を教えてもらったパンディットのシュリーニヴァーサ・シャーストリーとの出会いについて話したところ、井筒夫妻は頷きながら話を聞いて、ご自分の師ムーサーとの体験も話してくださった。筆者がシャンカラ（約700～750）の哲学を学んだシャーストリー師も、幼い頃からヒンドゥー教の伝統的な教育を受けて、主要な聖典テキストを記憶していた。師の書齋には、一冊の書物もなければ机もなかった。井筒の師ムーサーにとっても、筆者が教わったシャーストリー師にとっても、宗教の違いこそあるものの、聖典テキストは口から語り出される、まさに「語られる聖典」であった。

## 「語られる聖典」としてのクルアーン

司馬遼太郎との対談の中で、井筒はムーサーについて、次の

ようにも話している。最初の日に「代々木の家に来い」というので、井筒はムーサーの家を訪問した。家の奥の方に向かって、井筒が「サラーム（こんにちは）」と声をかけると、意外に近いところから、「アハラン ワ サハラン（よく来た、よく来た）」というアラビア語が聞こえた。目の前の押入れが開いて、その上段からムーサーが出てきたので驚いたという。井筒は次のように述懐している。

弟子入りしてみたものの習うといっても本もないし、どうするのかと思ったら、「イスラームでやる学問の本なら何でも頭に入っているから、その場でディクテーションで教えてやる」というんです。アラビア語学、アラビア文法学で「シーバワイヒの書」（8世紀の本で、アラビア文法学の聖書と綽名される）、ちょうどインドのパーニニ（パーニニ文典）みたいな古典的なものがあるんですが、それを習いたいといったんです。それは約千ページぐらいのもので、ムーサー先生はその本を端から端まで暗記しているんです。暗記している上に、その注釈本を暗記して、さらに自分の意見がある。それで、アラビア文法学を教わったんです。そのほかにもいろいろなものをその先生に教わりましたが、なにしろ本は使わない。全部頭に入っている。まあ、それはあっちのほうの学問の習慣でもあるんですね<sup>(3)</sup>。

あるとき、井筒はムーサーから「おまえ、旅行するときはどうして勉強するんだ」と尋ねられた。必要な本は持っていくと答えると、ムーサーは「おまえみたいなのは、本箱を背負って歩く、いわば人間のカタツムリだ」と言った。「その学問の基礎テキストを全部頭に入れて、その上で自分の意見を縦横無尽に働かせるようでない」とも言われたという<sup>(4)</sup>。

聖典クルアーンはイスラーム教徒にとって「神の書物」として「書かれた聖典」である。それと同時に、「クルアーン」の原義（「読誦されるもの」）が示唆するように「語られる聖典」でもある。井筒は『コーラン』の「解説」（1958年）の中で、「考えてみるともう一昔前になるが、初めて本格的な「カーリウ」（コーラン読み）の朗誦を聴いた時、私はやっとこのイスラームという宗教の秘密がつかめたような気さえたものだ」と記している<sup>(5)</sup>。彼が師ムーサーから学んだのは、クルアーンなどの聖典テキストのまさに「語られる聖典」であった。井筒の青年時代のエピソードは、イスラームにおける聖典のパロール性の重要性を見事に示していると言えるだろう。

[註]

- (1) 井筒俊彦〔司馬遼太郎との対談〕「二十世紀末の闇と光」『意識の形而上学』（井筒俊彦全集・第10巻）、2015年、605～638頁。
- (2) 井筒俊彦「行脚漂泊の師 ムーサー」『イスラーム文化』（井筒俊彦全集・第7巻）、2014年、227頁。
- (3) 井筒俊彦〔司馬遼太郎との対談〕「二十世紀末の闇と光」、1992年、613頁。
- (4) 同上書、614頁。
- (5) 井筒俊彦訳『コーラン』（「解説」）、井筒俊彦著作集7、中央公論社、852頁。





## 第2講：77「栗の節句」

教祖は、ある時、増井りに、

「九月九日は、栗の節句と言っているが、栗の節句とは、苦がなくなるとのことである。栗はイガの剛いものである。そのイガをとれば、中に皮があり、又、渋がある。その皮なり渋をとれば、まことに味のよい実が出て来る。人間も、理を聞いて、イガや渋をとったら、心にうまい味わいを持つようになるのやで。」

と、お聞かせ下された。

以上の逸話を、四つの視点から考察した。一つ目は「栗の節句とは苦がなくなるとのこと」、二つ目は「栗はイガの剛いもの」、三つ目は「心にうまい味わいを持つ」、そして四つ目は「栗の節句」の今日的意義についてだった。以下にそれぞれの視点について記す。

## 1. 栗の節句とは苦がなくなるとのこと

毎年、旧暦の9月9日は、古くから五節句を締めくくると「重陽の節句」とされている。味覚の秋、菊薫る秋ということで、「栗の節句」または「菊の節句」とも言われる。

そもそも五節句とは、季節の変わり目に邪気を払い、無病息災を願う伝統行事の一つで、1月7日の「人日の節句」、3月3日の「上巳の節句」、5月5日の「端午の節句」、7月7日の「七夕の節句」、そして9月9日の「重陽の節句」である。

古来、中国では奇数が縁起の良い「陽数」とされ、陽数が重なる日はなお縁起が良いとされてきた。さらに「9」の数字は最も大きな「陽数」とされ、9月9日は重要な陽数という意味で「重陽の節句」と言われる。これは日本でも同じように考えられ、「9」の数字は一桁の数字の中では最も大きい数字で、しかも奇数であることから、「9」が何桁も続く数字は縁起が良いとされている。

そのため、「栗の節句」ともいわれる9月9日の「重陽の節句」は、1年で最も幸せが訪れる日とされている。栗ご飯を食べ、菊酒を飲んで盛大に祝宴がおこなわれてきたこの日は、ある意味、それまでの苦勞から解放される日と考えることもできる。まさに「栗の節句とは、苦がなくなるとのこと」なのである。

## 2. 栗はイガの剛いもの

サボテンやバラなどのトゲ（棘）は、外敵から守り、水分の蒸発を防ぐ効果があるとされている。栗のイガ（毬）や周囲のトゲも、同様の効果があるとされ、自分自身を守るための堅い“盾”と“矛”の機能を果たしている。イガは、栗にとって身を守るための堅く強く、トゲトゲしい存在、まさに「剛いもの」なのである。

ところが、人間の心にはイガやトゲのような“盾”と“矛”は必要だろうか。むしろ、人間には、他人を威圧するようなトゲトゲしい心の“盾”と“矛”は、無用ではないだろうか。「剛いもの」すなわち“盾”や“矛”の心は、「陽気ぐらし」世界にもそぐわないと考える。葡萄のような「丸い心」（『稿本天理教教祖伝逸話篇』135「皆丸い心で」）をもつことの方が重要だと考える。

いずれにおいても、「イガをとれば、中に皮があり、又、渋がある。その皮なり渋をとれば、まことに味のよい実が出て来る」というお話は、私たちが持つ自分の癖・性分を、素直に見つめ直すことを促されている例え話ではないかと考える。これは、癖・性分を見直し、「丸い心」をもつならば、「まことに味のよい実が出て来る」と諭しておられるように思う。

また、「どんな辛い事や嫌なことでも、結構と想着てすれば、天に届く理、神様受け取り下さる理は、結構に変えて下さる」（『逸話篇』144「天に届く理」）とあるように、不足せず勇む心で望むならば、「まことに味のよい実が出て来る」のではないかとも思う。これが「陽気ぐらし」世界へ続く道ではないだろうか。

## 3. 心にうまい味わいを持つ

「人間も、理を聞いて、イガや渋をとったら、心にうまい味わいを持つようになるのやで。」の意味は、イガや渋のような個人の癖・性分を「丸い心」に切り替えることが大事であり、そのことが結果的に心暖かい味のある人間になる、と諭しておられる点にある、と先述した。

しかし、「心にうまい味わいを持つようになる」の解釈には、別の解釈も考えられる。毬栗のトゲ、堅固なイガに手こずりながらこじ開けたとしても、今度は硬い鬼皮に阻まれる。さらに全身を覆う渋皮を剥かない限り、美味しい栗の実にはありつけない。栗を食べるには、このようにイガ、皮、渋の段階を経なければならぬ。これらの経緯を思い浮かべながら、ありがたく頂戴するのも大切なことだ、という解釈である。

## 4. 「栗の節句」の今日的意義

増井りんは、明治10年頃から、教祖の「日を定めて勤めるよう」とのお言葉で、「おやしきづとめ」を始め、明治12年からは教祖のお守役を仰せつかった。また、りんは入信以来、教祖より「針の芯」のお許し、「息のさづけ」「あしきはらいのさづけ」「肥のゆるし」等、数々の重い役割をいただいていた。

明治13年秋頃、教祖から篤い信頼を得ていたりんに対して語られたのが、「栗の節句」のお諭しである。また明治13年9月22日（新暦）には転輪王講社の開筵式が執り行われ、同年同月30日には初めて鳴物をそろえてのおつとめが行われた。翌明治14年、5月上旬にはかんろだい石出しひのきしん、9月下旬にはかんろだいが2段まで出来上がるなど、かんろだい建設に勢いがついていた。

さらに、「こふきを作れ」との仰せにより、山澤良治郎、喜多治郎吉らも、教祖のお話を記す作業に専念していた。加えて、明治14年までには大和国や河内国、大阪や京都など、あちこちでたくさんの講が結成されたように、教勢の拡大は止まることはなかった。

このような教勢拡大の中にあっても、今回の「栗の節句」の逸話が示すように、しっかりと教えを心におさめることの大切さ、「心にうまい味わいを持つ」ことの重要さを、教祖はあえて増井りんにお諭しされたのではないかと考える。特に、教祖のお守役で信頼の篤い増井りんへの心のこもったお諭しは、当時40歳間近のりんにとっても、重要な意味をもっていたと思われる。

もちろん、今日を生きる私たちにおいても、この親神様からの重要なメッセージを、重要なお諭しとしてしっかりと受けとめなければならない。

勢いづいている時にはつい忘れてしまう心のゆるみ、他者への無配慮など、「栗の節句」にはこのような戒めの意味も、込められているのではないかと考える。

著者は、おやさと研究所のかつての同僚である。天理大学の学部に異動されたが、『グローカル天理』での連載をはじめ、研究所の研究会での発表など、その後も研究所との関わりは深い。『グローカル天理』での連載は、2008年に『中国音楽の泉』(「グローカル新書」第9巻)に結実している。

本書は、唐宋時代の楽器が奏でる音に注目し、人々の暮らしに存在していたその音を、詩文の力の中に追求している。そして、詩文が楽器の音/音色を織り上げていった音楽を人々がどのように享受していたかを解きほぐしていく。著者は、今まで語られてきた唐代音楽の常識を別角度から見直していくことで、これまで考えてこなかった唐代音楽の実相を見てみたいという。「外来音楽は果たして唐代一代を通じて盛んに流入していたのか?」「霓裳羽衣曲<sup>びいしょうういのきやく</sup>は本当に玄宗期の代表的な宮廷音楽と言えるのか?」など、いくつもの課題を自らに問いかけ、その一つひとつが研究成果として示されている。本書は専門的な学術論文で構成されている。本書のカバー裏面の紹介文によって、内容を紹介する。

魅惑的な外来音楽が盛んに演奏され、都長安の音楽文化が華開いた唐代、そしてそれが宮廷に留まらず巷にも流行し、その新たな曲調に合わせ詞を付す填詞<sup>てんし</sup>という文人の娯楽が出現した宋代—当時を生きた人々は、実際にどのように音楽を享受していたのだろうか。

本書は、これまで知られてきた唐宋の音楽世界を、詩文など豊富な文献資料を用いて丁寧に見直し、その実相を提示する本格的な業績である。

第1部は、今なお演奏される伝統音楽の洞簫<sup>どうしょう</sup>、及び盛唐を代表する「霓裳羽衣曲」が詩文として構成に伝えられる中で、一つの音楽像を形成していく姿を捉える。

第2部では、玄宗期に完成した礼楽儀礼とそれを掌<sup>つかさど</sup>った太常寺の意味を張説の詩文から読み解く。さらに辺境音楽の涼州曲を取り上げて、外来音楽が主流とされた唐代音楽世界を改めて見つめ直す。安史の乱と宮廷音楽との関係、楽人の離散による地方への音楽伝播、加えて唐代と宋代の音楽に対する考えの違いをも解明する。

第3部では、李白・王維・蘇軾<sup>そしやく</sup>の音楽描写から、都を追われた詩人が見た日常の音の世界を浮彫りにする。

詩文は楽曲や楽器を意味づけつつ、人々の間に広まっていた。本書は『詩人と音楽』の姉妹編で、読者に中国独特の音楽世界を紹介し、詩文に依拠して、唐宋の音色を今に伝える一書として貴重な作品である。

第1部で扱っている洞簫は、漢代のパンパイプ型の簫ではなく、添えられた図にあるように、縦笛のような形をしている。80cmほどの長さがあるという。『霓裳羽衣曲』の曲は、玄宗が婆羅門系の音楽を元に作った曲と言われるが、安史の乱以降、この曲は傾国の曲であると忌まれ、楽譜も散逸したらしい。白居易の「長恨歌」に曲名が登場する。この安史の乱は、安祿山

の乱とも記載される。唐が最盛期を迎えた玄宗皇帝の末期(755~756年)に、節度使と呼ばれた唐の辺境を守っていた武將の安祿山とその部下の史思明らによって起こされた反乱で、「長恨歌」で謳われた楊貴妃によって、その最盛期の唐は国が乱れたという背景があるとされる。

第3部に登場する蘇軾は、11世紀後半の北宋の政治家で、2度にわたり左遷された経験を持つが、格調高い詩文が知られ、古文の復興をめざした唐宋八大家の一人に数えられている。なお、これに関連して、同じ著者による『詩人と音楽—記録された唐代の音』は、2008年に知泉書館から出版された研究書で、この本は中唐の詩人白居易の詩と音楽の結びつきに焦点をあて、詩人が音楽をどのように詩に写し取り、伝承され、唐代音楽史の重要な資料として後世にいかにかに広く利用されたかを多様な視点から考察している。

本書の目次は以下の通りで、3部から成り、全10本の論文で構成されている。

第1部 詩文により音楽世界の創出

第1章 詩賦がもたらす楽器のイメージ—洞簫をめぐって

第2章 詩が創出した唐の代表曲—霓裳羽衣曲

第2部 詩文で辿る唐宋音楽の実相

第1章 唐代開元期における礼楽世界の完成—張説が描いた世界

第2章 辺塞音楽の中国化—涼州詞と涼州曲

第3章 唐宋音楽を繋ぐもの—唐代中盤期の蜀の音楽文化

第4章 唐宋期の古楽復興—古楽をめぐる言説から見えるもの

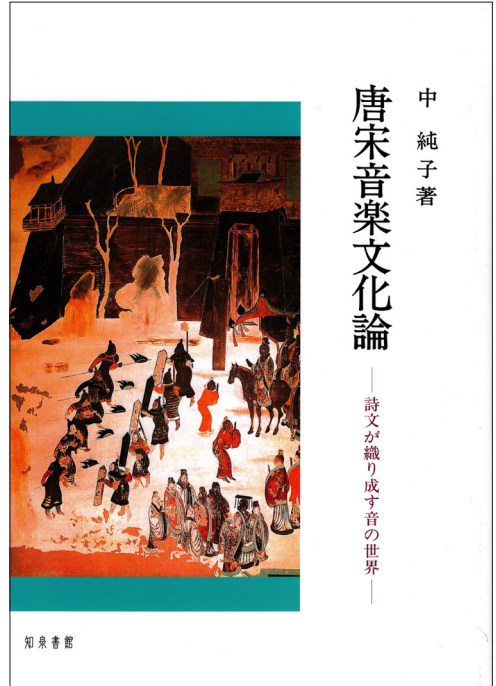
第3部 詩人と音楽の世界

第1章 イメージの中の音楽

第2章 音の定式からの解放—王維が開いた日常の音の世界

第3章 宋代文人と音楽—黃州における蘇軾の音楽文化探究

第4章 詩材としての日常の音—蘇軾が描く音の世界





## 第 334 回研究報告会 (10 月 30 日)

「英語メディア・文献にみる天理教海外伝道の歴史と展開  
—船場大教会のロンドン布教と『The Daily Chronicle』の  
「Tenrikyo: The Gospel of the Pure in Heart」—」

尾上貴行

本研究報告会では、まず最初に、天理教外の研究者による天理教研究について網羅的に検証している文献として大久保昭教氏の『外国人がみた天理教』(天理教道友社、1973 年)を参照し、主だった研究者による天理教に関する文献を確認した。

その上で、天理教の海外伝道の草創期に、ロンドンの現地新聞に掲載された天理教に関する記事に注目し、当時の天理教がどのように受け止められていたかについて考察した。1910 年、船場教会(現大教会)から 3 人の布教師がロンドンへ渡り、布教拠点「倫敦教宅」を設置して、布教活動を展開したことはよく知られている。同教会では、イギリス人に天理教の教えを紹介するために、*History, Doctrine & Practice of Tenrikyo* (Osaka, Japan: Tenrikyo Senbakyokwai, 1910) (以下、『英文天理教』)作成した。1912 年、この『英文天理教』に関心をもった新聞記者クラレンス・ルック (Clarence Rook) 氏は、現地新聞紙『デイリー・クロニクル』(*The Daily Chronicle*) の 3 月 23 日号に天理教に関する記事“Tenrikyo: The Gospel of the Pure in Heart”を寄稿した。天理教は「キリスト教の一派である」というようなキリスト教に基づいた理解が、その内容から読み取れる。さらに、ルック氏がクリスチャン・サイエンス(教えのなかで「病気治し」が説かれている)の信奉者であり、天理教の「病気たすけ」に関心を持ったためか、この「病気たすけ」や「八つのほこり」が、特に詳しく取り上げられている。

また本報告では、望月小太郎氏(政治家で英文通信社の経営者)による *Japan To-day; a Souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910* (Tokyo: The Liberal News Agency, 1910. 邦題『現時の日本』)にある天理教紹介文“Tenrikyo (A Sect of Shintoism)”(699～702 頁)も取り上げた。これは、1910 年にロンドンで開催された「英国博覧会」を記念して、日本の宣伝・紹介用に出版された約 900 頁におよぶ大著である。その内容から、望月氏は、国家間・日英関係という視点から天理教の紹介を試みたと考えられる。

このような英文での天理教紹介や天理教に関する記事を、天理教の布教師や信者たちは大変な関心を持って受け止めていた。ロンドンで布教活動を行っていた高見庄蔵、正信藤次郎の両氏は、ルック氏の記事を読んで、「教外者から英語による教理の説き方を教えられた」(梅谷忠一『英国布教ハ天ノ指命也』天理教船場大教会、2010 年、18 頁)と述べている。また『英文天理教』の日本語訳が、1910 年 9 月号から 12 月号まで『みちのとも』で「英文天理教抄訳」と題して掲載され、そのちに要望があり『英文天理教』と邦訳の『訳文天理教』として販売されている。

報告に引き続き活発な質疑応答が行われ、大久保昭教氏の『外国人がみた天理教』のような研究を継続する重要性を改めて確認した。

## 第 335 回研究報告会 (11 月 30 日)

「新型コロナウイルスとコロンビア」

清水直太郎(天理教コロンビア出張所長)

標記研究会を第 2 会議室にて開催した。コロンビアから帰参中の清水所長を発題者に迎え、コロンビアにおける新型コロナウイルス感染拡大の影響についてお話をうかがった。

ウイルス感染が拡大する中、3 月にはロックダウンがあり、その期間中に人々ができたこと・できなかったことがあった。外出の規制は厳しく、所有する自動車のナンバーや ID カードの末尾番号及びその組み合わせによって外出日が決められ、出張所では、2 週間に 1 度の買い出しとなった。また、トケ・デ・ケダという外出禁止令が出されたり、レイ・セカ(禁酒日)が設けられた。プロトコル(衛生上の約束事)は職種ごとに細かい指示があり、その指示に従った衛生対策を施した上で、衛生対策書を行政に届け出て検査を受け、それに通過しなければならない。例えば、入口にはアルコール消毒液を設置するが、それは足踏み式で、手で直接容器に触れないで済むような造りになっている。出張所でも 10 台を導入した。宗教施設・宗教活動についてのプロトコルでは、例えば、おつとめなど、人が集まる場合には、30 人以内・30 分～50 分以内と決められたようだ。すでにこのプロトコルに従って衛生対策書を提出し、許可を得たカソリックの教会があり、30 分以内の短いミサを行っているという。出張所は、この対策書を作成中で、提出はまだしていない。出張所の日本語教室や空手教室は、オンライン(Zoom)を使って継続して教室を開いている。

こうした新型コロナウイルスによる状況をどうとらえるか。親神のメッセージとして、今こそ先人の歩んだ信仰の原点を思い、戦争はなく、食べ物や電気・水もある今に感謝し、おたすけに邁進することができるのではないかと、清水所長は述べた。その後、活発に質疑応答があり布教や信仰について再考する機会となった。(堀内記)

## 『グローバル天理』 合本、バックナンバーについて

2016 年以降に出版された『グローバル天理』の合本を頒布しています。これは各 1 年分(12 号分)を 1 冊にまとめ、簡易製本したものです(頒価は 200 円)。またバックナンバーも、希望者に無料でお分けしています。

ただし、合本はご注文を受けて製本しており、またバックナンバーは在庫を確認する必要がありますので、希望される方は、必ず事前に電話、FAX、もしくは E メールでご連絡くださるようお願いいたします。

なお、お持ち込みによる『グローバル天理』の合本はしておりませんので、予めご了承ください。

問い合わせ先:

〒632-8510 奈良県天理市柚之内町 1050  
天理大学 おやさと研究所『グローバル天理』編集部  
TEL・FAX 0743-63-7255  
E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

# 天理大学おやさと研究所 2020年度公開教学講座

## 信仰に生きる 『逸話篇』に学ぶ(6)

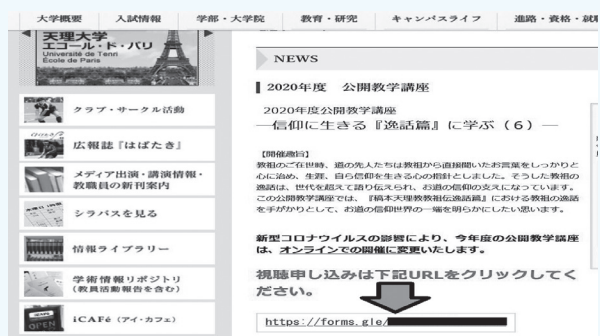
本年度の公開教学講座はオンラインでの開催となりました。  
第4回目の配信は1月1日~同月末です。

### オンラインでの視聴方法

#### ① おやさと研究所のホームページへ

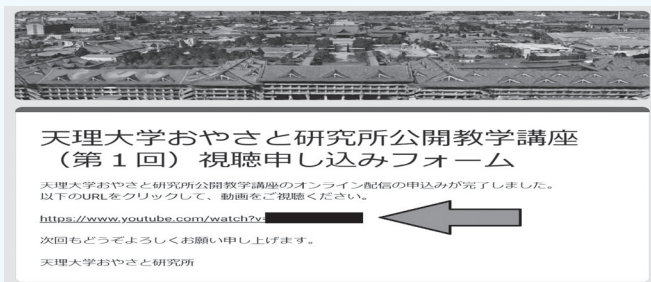


#### ② 「視聴申し込みはこちら」をクリック



#### ③ 申し込みフォームに記入

#### ④ 送信後、動画のURLが表示されます



#### ⑤ URLをクリックして、ご視聴ください



- |                                     |   |
|-------------------------------------|---|
| 第1回(10月):<br>永尾教昭所長<br>75「これが天理や」   | 第4回(1月):<br>澤井真研究員<br>93「八町四方」            |
| 第2回(11月):<br>佐藤孝則研究員<br>77「栗の節句」    | 第5回(2月):<br>八木三郎研究員<br>106「蔭膳」            |
| 第3回(12月):<br>岡田正彦研究員<br>88「危ないところを」 | 第6回(3月):<br>堀内みどり主任<br>103「間違いの<br>ないように」 |

グローバル天理  
第22巻 第1号 (通巻253号)

2021年(令和3年)1月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 永尾教昭  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市袖之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan